笑顔でつながる福祉の輪

下阪本学区社会福祉協議会編

日本では６５歳以上の高齢者が４人に１人という超高齢社会を迎え、社会環境が大きく変化しています。このような社会環境の変化に伴い、家族や地域において個人を支える機能が弱まり、人と人のつながりも希薄化しています。このような変化は今後さらに加速化すると予想されています。下阪本学区も同様、まさに急激な変化に飲み込まれそうであります。ちなみに、下阪本学区の人口は１１,４３８人（令和４年５月１日）で、６５歳以上の高齢者は2,２７１人、高齢化率は１９．８%です。

このように地域社会は大きく変化していますが、「子どもや高齢者の皆さんが自分は１人ではない。ここ下阪本には自分を支えてくれる仲間や友だちがいるのだ。今日はこの催しに参加してよかった。楽しかった。また、明日も頑張りたい」と思っていただけるような福祉サービスをこれからも提供していきたいと、下阪本学区社会福祉協議会会長の杉本晋一氏が、目を輝かせて語って下さいました。

下阪本学区社会福祉協議会では、杉本会長を中心に１０名の方が活動され、新型コロナウイルスの影響でここ２年は事業を中止せざるをえなかったのですが、今年こそ今まで行なってきた福祉サービスを再開したいと思っておられます。従来の主な活動は次の通りです。

①「敬老の集い」

９月の「敬老の日」に併せて、学区内に居住されている７５歳以上の高齢者に「敬老の集い」の招待状を送付。例年、下阪本市民センターにて１２０名ほどの参加があります。社協だけでなく、各地区から選出された福祉委員や民生委員児童委員をはじめ各種団体が協力して、「敬老の集い」を盛り上げてくれています。先陣を切ってプロの漫才師や落語家が登壇、その後は地域のコーラス部や下阪本幼稚園児・下阪本小学校生がコーラスなどの出しものをして自然と和やかな雰囲気を醸し出してくれます。

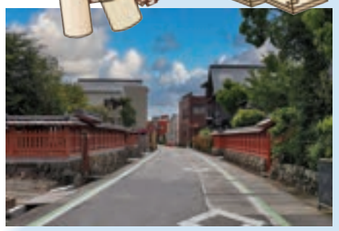
②「福祉まちづくり講座」

例年１１月、５会場（四ツ谷志津若宮神社社務所、柳町自治会館、北大道町自治会館、比叡辻町自治会館、木の岡町自治会館）にて、高齢者を対象とした「出前講座」を５回開設、参加者は１００名程度。この事業も該当地区の福祉委員や民生委員児童委員等がサポート。午前中は主として健康に関するお話や体操。参会者みんなで昼食をとった後、いよいよお楽しみタイム（のど自慢、小話やゲーム・マジック等）。この講座は人気があります。それは人と出会って話ができる、みんなと楽しく食事が食べられる、心より交流ができる、まさに人間の欲求・自然の条理にかなっているからではないでしょうか。

③「子ども支援事業」

夏休みや春休みに、下阪本市民センターにて下阪本小学校生を対象に「みつはま教室」を５回開設。その参加者は２００人を超える年もあり、とても盛況です。また、そのサポーターは実に７０数名で、地域の皆さまに支えられて成り立っています。夏休みは主として自由研究や宿題のサポート、最終日にはみんなでカレーライスを食べてお開き。また、春休みには「百人一首・カルタ大会」「英会話に親しもう」等が開設されます。この事業は、「地域が子どもの見守り・成長」の一翼を担うといった将来求められている地域活動の先取りではないでしょうか。

酒井神社と両社神社の歴史（その 1）



下阪本・坂本地区には神社仏閣や祠（ほこら）などが多々存在していますが、現在に至るまで殆どが地域有志によって守り伝えられています。酒井神社・両社神社もその一つで下阪本市民センター付近にあって、旧北国街道の両社の辻を挟むように南北に対照的に建立されています。

両社が挟む道は「山王祭神事」において、祭神七社の神輿（みこし）が船渡御神事のため日吉大社から琵琶湖へ下る道筋になっています。鳥居・本殿・拝殿・社務所などが瑞垣（みずがき）で囲まれ、その相似形建築形態から二つの神社には深い繋がりが有するように見えます。しかしながら、その由緒は大きく異なるようです。

酒井神社にあっては弘仁 4 年 (813) の創建との記録が残り、日吉大社東本宮の大神「大山咋命（さくのみこと）」が祀られ、「酒井の旧跡」とされている梵音堂の石碑には「弘仁元年 (810)5 月 23 日酒湧き出る。酒の精は大山咋命なり」と神告があった事から、村人がこの泉を掘ったところ石型の御神体が出てきたと伝えられています。

酒泉が湧き出たのは古来吉例により、社を建て酒井大明神として崇敬されたものと伝えられます。さらに、「河泊神社（天正７年【日吉山王秘密社参次第記】）の記述には、酒の精を祀るとともに港の守り神としての性格も併せ持っていたようです。中世の下阪本には馬借・車借が集住していた事や、比叡山や京都への物流を担う港として賑っていた時代の名残でもあると言えるのではないでしょうか。

一方、両社神社の創建は元和 2 年 (1225)、祭神は神話にも登場する「イザナギ・イザナミの命」であり、穴太にある高穴穂神社の分霊を酒井神社の境内に勧請したと伝えられています。

両神社とも現在の本殿は一間社流造、檜皮葺（ひわだぶき）で、工法や組み物、彫刻など、江戸時代初期の神社本殿建築の特徴を継承する貴重な社殿として、昭和 34 年に滋賀県指定文化財に認定されています。また、両社神社境内に安置された兎の石像や、両神社の瑞垣の瓦屋根に設置された兎の飾り瓦などが目につきます。これは日吉大社の守り神とされる「神猿（まさる）さん」の如く、「うさぎ」を守り神として奉られたのではないかと、想像が掻き立てられます。

これには、下阪本近辺の社や裏庭などの野原には昭和初期頃まで兎が多く見られた事もあり、子どもたちが自然に親しみ、たくましい成長を願ってのものとも考えられるのではないでしょうか。

また、元亀２年（1571）には織田信長による比叡山焼討に際し、両神社とも被災消失しています。乱後、明智光秀により建立され坂本城は、丹羽長秀、杉原家次、浅野長政と城主がかわりました。その後も浅野長政は両神社を崇敬庇護するとともに、天正３年（1575）には社殿修理とともに「剣一振り」を寄贈したと伝えられています。これは長政の長男である幸長（よしなが）の産土神（うぶすながみ：生まれたところ）とされているところに起因しているようです。

当時の両社神社は酒井神社境内にあったと伝えられますが、元和６年（1620）には浅野長政の次男で広島藩主であった浅野長晟（ながあきら）が新たに境内を整備し、酒井神社から独立して現在位置に本殿が建立されました。その後にあっても酒井・両社神社は浅野家と密接な関係で結ばれ、江戸時代を通じて修築費用などにあっても同家の経費により大切に庇護されてきたものです。

さらに、両神社ともに毎年正月に催される「おこぼまつり」にあっては、何よりも大切に伝統を守りながら現在まで受継がれています。その他にも、5 月３日の例大祭や 11 月 22 日の「まいどこ神事」なども粛々と営まれています。詳細につきましては次号にてお知らせしたいと考えていますのでお楽しみにお待ちください。